俳句、その滑稽の歴史③

日根野聖子

明治二十六年、「**発句は文学なり、連俳は文学に非ず**」（「獺祭書屋俳話」）として、発句のみを一文学として独立させ、「俳句」と呼んだのは、正岡子規である。子規の俳句革新は、西欧の個人主義と現実主義を根幹とし、子規にとっての文学とは、孤独で真剣なものでなければならなかった。また子規は、「**天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず称して月並調といふ**」（「俳諧大要」）と言って、幕末以来の古い俳風を非難し、俳諧を近代文学として新生させようとした。発句のみが詠まれることも、「俳句」という呼称も、既に子規以前にあったことではあるが、これまでの俳諧とは違う新しい文学なのだという意識をもってなされたのは、子規が最初と言える。子規は、俳諧における滑稽を、俳句の中でどのように考えていたのか、子規の言葉を拾ってみたい。

「獺祭書屋誹話」の冒頭、子規はまず、芭蕉の滑稽観を次のように定義する。「**俳諧といふ語は滑稽の意味なりと解釈する人多く其意味に因りて俳諧連歌俳諧発句と云ふ名称を生じ之を略して俳諧と云ふ。されど芭蕉已後の俳諧は幽玄高尚なる者ありて必ずしも滑稽の意を含まず**」。また続けて、芭蕉および蕉風の門弟のいう滑稽を、「**雅俗の言語混淆し其思想の変化多くして且つ急激なる**」ものだと言う。

「俳諧大要」では、「**滑稽も亦文学に属す。然れども俳句の滑稽と川柳の滑稽とは自ら其程度を異にす。川柳の滑稽は人をして捧腹絶倒せしむるにあり。俳句の滑稽は其間に雅味あるを要す**」と言っている。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

「俳句二十四体」の中では、「滑稽体」を一つの分類に挙げ、「**滑稽体は一読して笑を催さしむる句をいふ。さりとて川柳のひたすらに噴飯せしむる者とは異なり、俳句は滑稽のうちに品格あり趣味あるを要す**」としている。

これらの発言から、子規は俳句における「滑稽」をはっきりと意識し、子規なりの意見、定義をもっていたことが分かる。芭蕉は、雅と俗の均衡を保持しつつ滑稽を芸術として高めんとし、子規は、俳諧を近代化して俳句として新生させ、文学の近代化の波に乗り遅れさせまいと、滑稽に厳しい条件もつけた。いずれも、滑稽の品質向上を目指し、その時代に生き残るための術ではあったのだが、ともすると俳句の高尚性ばかりが前面に出てしまう結果となった。

以上、子規までの俳句の歴史を概観した。本来、俳句は俳諧であった。俳諧は滑稽であり、一般庶民の生活を自由に詠うものであった。しかし、時代を経るにつれ、俳句、俳諧の原点である滑稽は、芸術、近代化の名のもとに、その本質論からいつの間にか影を薄くする。ここで今一度、俳句の「俳」の意味と歴史を、振り返ってみることは、俳句の本質を確認することにつながる。また、俳句の本来の存在意義が腑に落ちたとき、そこには、「滑稽」の文字がはっきりと浮かび上がってくるはずである。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。